

滑石の歴史

「滑石」という地名は、戦国時代の余韻が残る今から400年以上前の慶長4年(1599年)、大村氏によって作成された『慶長高長』の中に、「滑石村」「平宗村」として記録が残されています。

その後、文久2年(1862年)の「滑石村」の人数は、608人であると大村藩の『郷村記』には記されています。

明治時代を迎え、「滑石村」は「滑石郷」として西彼杵郡に属した後、昭和13年に長崎市に編入をします。

昭和24年、西浦上村が5町に分割し、その中の一つとして現在の滑石につながる「滑石町」が誕生。¹

昭和39年から滑石団地の開発を中心に町づくりが進められ、現在、滑石地区は、住宅地域、文化商業地域として活気溢れる町、人々の連帯意識と強いきずなで結ばれた町として輝きを放っています。

¹ 長崎滑石郷土史誌(1988 編纂委員会編)第2章 近世の滑石「滑石の知行」、第4章 新しい街づくりから今日まで「滑石の変遷」より

滑石の地名の由来

石鍋の素材となっている滑石(かっせき)は、西彼杵半島の地質から見受けられる蛇紋岩の周縁部、滑石鉱床から掘り出されているものです。現在のところ、滑石(なめし)においては、石鍋の遺跡は確認されてはいませんが、西日本各地で石鍋が出土しており、その最大の製造地が西彼杵半島と長崎半島で、工房跡は多数確認されているとのことです。

このように、遺跡の分布地域の観点から、滑石(なめし)の地名は、滑石(かっせき)を意味するものではないかと推測する説があります。²

²長崎滑石郷土史誌（1988 編纂委員会編）第1章長崎のあけぼの「1 浦上と考古遺跡」より